

都市政策・地域経済ワークショップ1 持続可能な観光 観光における「図と地」論を中心に

2023年4月14日

文責

大阪公立大学 都市経営研究科

都市政策・地域政策コース

宮外真理子

学籍番号 BFA23028

0. 登壇者

吉兼秀夫先生

京都外国語大学国際貢献学部

グローバル観光学科 特任教授

1. 観光動向の変化

観光期待の変化については、見学や鑑賞から体験や経験へと変化し、知的関心を満足させること、そして暮らすように旅することが求められるようになっていきます。また、多様な期待や高い要求水準、そして異文化理解への期待とより高度に変化してきています。

これらの変化に対応するために、持続可能な観光の実現が求められています。そのためには、地域住民や観光業界、事業者が協力して、地域の資源を守りながら、観光客に提供できる魅力的な情報や施設を提供することが必要です。

2. 観光における「図と地」論

観光においては、観光客が訪れる観光地の「図」（ぱっと見てわかりやすい部分）と、その地域の実際の生活環境である「地」（一見見えづらいが見方を変えたり枠を加えると見えやすくなる部分）の関係性を考えることが重要です。

観光客は、最初はその地域の「図」に魅力を感じていることが多いです。具体的には、モンサンミッシェルや東京タワーなどです。しかし、「図」は一度訪れると、他の「図」に目が行きがちで、なかなかリピーターとして再度訪れることはありません。

しかし、その地域の実際の生活環境や文化である「地」を知ることで、その地域に対するより深い理解が生まれ、話のネタとなり、また訪れたいという気持ちになります。例えば、東大寺を訪れた次の日に友達とする会話は、大仏の大きさではなく地元のおばちゃんとした何気ない会話についてだったりします。このような Serendipity（幸せの発見）が重要です。

「地」の観光を創造するためには、地域住民が観光・まちづくりの主体となる必要があります。自分たちの地域の暮らしに自身と誇りを持ち、観光のルールを自ら制定し、地域住民にとっても観光客にとっても幸せな観光をデザインする必要があります。

3. エコミュージアム

エコミュージアムはフランスの G.H.リビエールが発想した概念で、エコロジーとミュージアムの合成語です。リビエールによると、エコミュージアムとは「地域社会の人々の生活とそこの自然環境、社会環境の発展過程を史的に探求し自然遺産及び文化遺産を現地において保存し、育成し、展示することを通して当該地域社会の発展に寄与することを目的とする博物館」です。

登壇者の吉兼秀夫先生は、エコミュージアムは従来の博物館のように建物の中に資料を集めて展示するだけではなく、地域の遺産・記憶を本来の場で保存活用するものであり、地域での宝探しや魅力探しをするようなものであると述べています。エコミュージアムの探索（構造化、計画、サインなどの仕掛け、語り部と語り手システムなど）を経て、それを活用した地域独自の観光システムをデザインします。

エコミュージアムの評価基準は、結果よりも活動過程を重視します。地域の特性を踏まえ一定文化圏における時間軸を意識した現地保存型・分散型博物館をデザインし、地域の記憶を統合し、地域住民を中心としたグループが自文化を自分化・創造し、観光活用も意識しながら地域社会発展に貢献する活動を続けていくことが重要です。

4. まとめ

観光期待が見学から体験へと変化しています。当該地域の「図と地」を意識し、特に「地」を地域住民が中心となって創造していくことが重要です。参考になるのはエコミュージアムという概念で、地域全体を博物館に見立て、地域の宝・魅力の探索を行い、まち全体で観光をデザインし、地域社会の発展に貢献します。